

ハトの巣作り アーリントンから



江田島健児

ハトの巣作り

ハトとカラスではどちらが頭がいいのだろうか。

カラスについては、頭の良さ、カラスの知能や頭脳について新聞やテレビでも話題になり、よく知られるところである。その攻撃性においては、どの鳥よりも知能犯的である。それに比べると、人を襲うハトなど聞いたこともないし、田舎でも農作物を食い荒らすハトの話聞いたことがない。

日本の童謡にもある“そうだ。平和の白いハト・・・”のように、ハトは平和の象徴として教えられた記憶がある。しかし大きくなるにつれ、観光地や名所・旧跡で見かける群れるハトは、人が撒く餌に群がり、人が近づけばひょこひょここと逃げ回りながらぱっと一斉に飛び上がる。ハトが止まった建物の隅や巣の廻りはハトの糞で汚れていることが常である。そんなあまり有難くもないむしろ迷惑で愚鈍なハトの記憶が鮮明さを増す。

はたしてハトは愚鈍なのか。ボクは今迄ハトについてこんなことを考えもしなかった。

しかしある日、アメリカはテキサス州アーリントン市の銀行のドライブ・スルーで預金をするために筒に金を入れて窓口へ送り、預金額のレシートを車の中で待っていた時のことである。

銀行の傾斜している屋根から一羽のハトが地面に飛び降りてきた。

ああー、ハトか。無意識にそのハトを見つめていると、地面で見つけた小枝を口にくわえ、ドライブ・スルーを覆っている横に突き出した庇と傾斜した屋根の隙間にある作りかけの巣に戻って行った。巣に小枝を置いたハトはまた地面に降りてきて、地面に転がっている幾つかの小枝を嘴で突っつきながら一本の小枝を選んで口にくわえて巣に戻って行く。

鳥が木の枝や建物の屋根に巣を作る。日本でツバメが軒先に泥で巣を作るのを見たことがある。

目の前のハトを見ていると、だんだんハトの行動に興味が湧いてくる。よく見ると、ハトがただ無造作に小枝を拾っているのではないことがわかる。ハトは、一本の小枝を嘴で吟味しながら拾っている。と言うよりも、考えながら小枝を選別しているのだ。一度口にくわえた小枝をぴょいと投げ捨て、また新しい小枝を口にくわえる。気に入ったらというよりは、これだと確信したその小枝をくわえて巣に戻って行くのである。

時には口にくわえた小枝を巣に持って帰り、しばらくしてその小枝を、長かったのか短かったのか、小さかったのか大きかったのか、口にくわえて地面に舞い降りひょいと投げ捨て、新しい小枝をくわえて巣に舞い戻って行く。

ハトが巣を作っている。当たり前のことであるが、自分の巣を作るために小枝を選別しながら作っている。

小枝だったら何でもいいわけではない。長さ、大きさ、形状を考えながら自分の巣を作っているとしたら、大工や建築士みたいではないか。それに巣の位置から考えて、雨風をしのげる場所を考慮しているとすれば、それはカラスに劣らぬほど賢いことではないか、感心さえもする。